

---

# まりさんぽ

ルシフェル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まりさんぽ

### 【Zマーク】

Z9503S

### 【作者名】

ルシフェル

### 【あらすじ】

ここは幻想郷

暇を持てあましている魔理沙

その彼女がどこかに出かけるようですが

はてさてどんなできごとが起きるのや〜り...

## (前書き)

はい3作目です  
今回は東方です  
イメージは平和な日常の一人称、つまりほのぼのですね  
でねびづね

田舎つぽこものがあります  
嫌な方はロターンをお勧めします

「暇だぜ…」

と木の上で霧雨魔理沙がくつろいでいた。

時間は遅めの朝、天気は晴れ。  
こんな良い天気だが特に何もやることない、魔理沙は木の上で休んでいた。

「色んなところを回ってみるか…」

暇だからか色々所に遊びに回ってみると云なつたみたいだ。

アリス・マーガトロイドの家

「で私の家に来たのね？」

「まあそりこいつ」とだざ。

魔理沙は始めてアリスの家に来た。

今はアリスが出してくれた紅茶を飲んでる。

「私の家に来ても何もやることないわよ。」

「そうだな…あつ、そういうやアリスの作つてる人形あるだろ?」

「ええ、あるわよ。それがどうかしたの?」

魔理沙は何か思い出したようにアリスに質問する。

それにはどうかしたのかと質問で返す。

「あれつて、自分で操つてるつて言つてたけど、絶対嘘だろ。」

「そんなことはないわよ。前にも言つたけどあれは全部ではないけど操つてるの、セミオートマトン半自律人形。」

アリスの魔法に疑問を持つ魔理沙は、信じないとばかりに断言する。アリスはそれに反論する。

「じゃあ、私にもやらせてみるよ。」

「いいけど…無理だと思つわよ?」

「大丈夫だつて。」

魔理沙は自分で証明してみるとアリスに頼む。

アリスはやつてもいいが上手く動かせないだろ?と言つが、魔理沙は手をプラプラさせて平氣だと言つた。

それを見たアリスは仕方ないと椅子から立ち上がり、棚の上から一  
体の人形を持ってきた。

「どうぞやってみなさい。たぶん無理だと想つかば。」

「そんなことやってみないとわからないぜ。」

人形を机に置いたアリスは再び無理だろつと叫つが、魔理沙はそれを無視してやってみた。

「…一ツ！」

「やつぱり上手くできないわね。」

魔理沙は手を動かして上手くできない。手でできないからか魔理沙は体まで動かして必死にしていた。

アリスはそれを見て少し、何か含みのある笑みを浮かべながら魔理沙に言つ。

「ん~やつぱり自律人形じゃないのか?」

「だから違うわよ。貸してみなさい。」

アリスは魔理沙の手から自分の人形を返してもうつと器用に動かす。人形からは剣が出ており、時々命令を出して剣舞を上手にしていた。

それを見て魔理沙は感心していた。

「やっぱり凄いな、アリスは。」

「そ、そりでもないわよ／／／

魔理沙はアリスの見事な人形使いに純粋な感想を述べるが、それにアリスは照れてしまい顔が少し赤くなっていた。

「よしもつ一回やけりしてくれ！」

「何度もいいけど…」

魔理沙は意氣込むと、アリスの手にあつた人形をパツと取つてしまつた。それもアリスの言つてる途中で。よほど上手なりたいのにあろ？。

アリスは机の上に頬杖をついて魔理沙の様子をしばらく見ていたが、さつきよりもほんの少しだが魔理沙は上手になつていた。

「結構上達早いわね。」

「そりなのかな？」

「ええ、私もそこまで早くなかつたわ。」

アリスがそういうと魔理沙はそつかと短く咳くように言つたが、魔理沙の顔は笑顔になつっていた。

それから魔理沙はまた人形を上手く動かす練習を始めていた。

「そりそり練習してるとこり悪いんだけどそれにあまり魔力込めないでね。それ多くの魔力込めたら爆発するやつだから。」

「え？なんか言つたか？」

アリスが途中で思い出したように魔理沙に忠告するが、魔理沙は集中していたのでよく聞こえなかつたようだ。  
さらにその瞬間、魔理沙は思わず力んでしまい魔力を多めに入れてしまつた。

するともちろん……

ドオオオン！！

魔理沙が持つていた人形は爆発してしまい、部屋全体がごちゃごちゃになる。魔理沙やアリスはギャグ漫画みたく煤によつて黒くなつていた。

「……魔理沙？」

アリスの顔は笑つてゐるが額には怒りマークをつけていた。背後に般若のようなものが見えるアリスに魔理沙は冷や汗を流す。

「えつと……ごめんだぜーーーー！」

「魔理沙あああ！！！」

魔理沙は最後に謝つていつたが手伝おうとはせず早々にアリスの家を去つていつた。アリスも最後に叫んでいたが無常にもそこら一帯に声が通るだけで、今日は魔理沙が戻つてくることはなかつた。

博麗神社

「あ～大変だつたぜ。」

「いや、アリスの方が大変だと思つわよ。」

時間は昼を回つた頃。

さつき酷い目にあつた魔理沙は今度は<sup>はくれいれいむ</sup>魔理沙の<sup>は</sup>靈夢<sup>れいむ</sup>はシツ<sup>ハシツ</sup>「ハハながらお茶をすすつていた。

魔理沙の<sup>ハシツ</sup>靈夢<sup>れいむ</sup>はシツ<sup>ハシツ</sup>「ハハながらお茶をすすつていた。

「そんなこといつたつて、あれは事故だぜ。」

「まあそつかもしらないけど、片付けもしないでじつちに来たわけ  
でしょ。」

「じゃあ靈夢も手伝つてくれるのか。」

魔理沙は靈夢に言い訳をするが、靈夢もまともなこと<sup>ハシツ</sup>を語ついている  
ので反論が上手くできない。

しかしそれならば手伝つてくれるのかと皿をキラキラさせた靈夢に  
頼む。

「それは嫌よ。めんどくさいもの。」

だが靈夢はそれをきつぱりと断つてしまひ。理由はただめんどくさいからといつもの。

それには魔理沙は一瞬しかめつ面をするが、何を言つても無駄だとわかつたてているため諦めてすぐ前に前の景色を見る。

「で私のところに来てどうするの？アリスの家みたいに爆発だけは止めてね。」

「わかつてゐよ。やうだな…。」

（暇つぶしのために）考え込む魔理沙。少し考えると何を思つたのか突如こんなことを言い出す。

「やうだ。服を交換しようぜ。」

「は？」

魔理沙の提案に案の定靈夢は意味がわからなこと話があげてしまう。

「こつもれの腋の開いた巫女服ばかりじゃつまらないだろ？」

「つまらないとかの問題じやないと黙つんだけビ…。魔理沙は交換しても別にかまわないの？」

「ん？別にかまわないぜ。」

靈夢は魔理沙の提案に自分はいいのかと聞くが、魔理沙はあつさつ

と承諾して切り捨てる。

靈夢はそれを聞き、腕を服の前に当てて拒否の意思を示した。

「やべー…

「あら、なんか面白そつね。」

いきなりどこからか声がした。

しかし靈夢や魔理沙も驚くことなく平然としていた。  
なぜならそこには現れたのは八雲 紫だったからだ。

「……またこいつ時に現れるのね。」

「面白そつたからね。」

靈夢は面白いからという理由で呆れている。そしてそれと同時に、  
味方してくれるところの期待と魔理沙の方に加勢されるところの  
99%の不安が渦巻いていた。

「とこいつで着替えましょ。」

「とこいつでじやなくて私嫌なんだけビ…」

「「問答無用…」」

「えつ…ちよ… もやああああ……」

靈夢は必死に抵抗するも一人の前には意味もなく、無常にも靈夢の  
声が境内に響き渡るだけだった。

そして3分後

「ううう／＼／＼

「けつこう恥ずかしいぜ、これ／＼／＼

「あらなかなか似合つてるわよ、お一人さん。」

着替え終わつた二人は凄く恥ずかしがつていた。  
それに紫が嘘か本当かわからないお世辞を言つ。

ちなみに一人の服は今さつきまで着ていた服ではなく、代えの服である。

靈夢はさすがにそれは嫌だと言つて断固拒否したためだ。

着替えたためそれの服は端にきれいにたたんで置いていた。

「てか服を交換したいって言つていた本人が恥ずかしがつてどうするのよ。」

「まさかこうも恥ずかしい服装だとは思わなくて…」

「それって年中恥ずかしい服を着てるつてこと…?」

自分で言つておいて恥ずかしがる魔理沙。

それにシッコリを靈夢が入れるが、逆に自分がダメージを取けてしまつた。

そしてもう一人、なぜか気持ち悪くもじもじしている人がいた。

「なんていでかいのかしら。」

「えつと…なぜかハ雲 紫さんはいつもじもじしててのかしら？」

紫の状態を見た靈夢は思わずフルネーム＆敬語で尋ねてしまふ。魔理沙もそれに返づいたため、靈夢の少し後ろに下がる。

「靈夢……」

「あやああああ……」

予感が的中し、紫は一きなりに飛び掛つて、靈夢に抱きついてきた。

そのため靈夢の一度田の絶叫が響きわると同時に畠に倒れてしまう。

悲鳴をあげるが紫は気にした風もなく思つてきり抱きつこうとすりつてしまふ。

「見てないで、魔理沙も助けなきよ……つて。」

靈夢は魔理沙に助けを請おうとして振り向くが、これは誰も居なかつた。

誰もいないとわかつた靈夢は怒りと同時に絶望した。

抱きつく紫と抱きつかれる靈夢。

一人の時間は夕方ごろまで続くのであつた

「……まあ氣にしたら負けだよな。」

靈夢が助けを求めていたころはすでに外に出ていた魔理沙はすでにいつもの服装に戻っていた。

そして簫にまたがつて飛んでいる彼女の姿は静かに空に消えていくのであった。

「… てあつたんだぜ。」

「そうか。」

現在香霧堂<sup>こうじゅうどう</sup>いる魔理沙はここ<sup>ここ</sup>の店の主、  
森近霧<sup>もりちかりんのすけ</sup>之助通称香霧<sup>こうじゅう</sup>に少し  
嬉しそうに今日の出来事を話していた。  
椅子に腰を掛けている香霧も嬉しそうに話している魔理沙の言ひつけ  
とに相槌を打つている。

「本当に… 楽し… かつたぜ…」

しばらくすると魔理沙は今日の出来事で疲れたのかはたまた話をし  
てすつきりしたのか机の上で寝てしまった。

それに気づいた香霧は立ち上がり奥の方に消えていった。  
しばらくして帰ってきた香霧の手には毛布を持っていた。その毛布  
を魔理沙にそつと優しく掛ける。

掛けた香霧の顔は親のよつた慈愛に満ちていた。

そして最後に香霧は魔理沙に起きない程度の声でこつ呴くのであつ  
た。

「ねやかさ」

(後書き)

いかがでしたでしょうか？

まあ途中のゆかれいむは僕の暴走ですねwww

あと服なんですけど…違つ服だとどうなるのかなあって思つて…ひつ  
なつたわけですね、はい

そういうえば最後変な終わり方になつた気がする…  
あとキャラ上手く書けてるか心配…

まあ感想・評価・誤字等お願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9503s/>

---

まりさんぽ

2011年10月8日04時55分発行